

【氏名】辻本 香子

【所属大学院】(助成決定時)

総合研究大学院大学 文化科学研究科 比較文化学専攻

【研究題目】 音の環境からみる音楽観形成過程の比較

—東アジア・東南アジア華僑の中国獅子舞を中心に—

【研究の目的】

現在、ヒトが流入しビジネスの中心地となる都市には高層ビルが立ち並び、グローバル化する世界において画一的な景観を呈しているように見える。しかし視覚を離れて考えると、例えば東アジアの都市における喧騒、匂い、食べ物などには、地域的な特徴がより強く表れる。

近年の人文社会科学は、このように感覚から文化を捉える発想への関心を強めてきた。そして、感覚・感性の文化という切り口によって、領域を超えた緩やかな概念が築かれ始めている。ここでは特に聴覚とそれがとらえる音に着目した。都市の信号音、BGM に使われるさまざまな音楽、そして地域に根ざした芸能の音によって構成される音の環境は、従来の音楽という用語では分類できない。本研究は、社会学やメディア論が論じてきた聴覚文化の概念をもとに、このような音の重なりの中で、人々は音楽を含めた音をどのように聴いているのかを明らかにすることを目的とした。

【研究の内容・方法】

中国獅子舞は世界のチャイナタウンで見られ、春節をはじめ、地域の祭りや婚礼、商店の開店などを祝い、商業ビルや屋外で太鼓と鉦の大きな音を響かせる。これらは主に華人・華僑によって伝承されているため、従来の研究では中国に関わるアイデンティティの表象として論じられてきた。だが、近代以降の都市で共同体やコミュニケーションが大きく変化するにしたがって、かつて農村や下町の共同体において伝承され聴かれていた音楽や芸能のあり方も変容している。例えば世界の多くの獅子舞チームが自分たちの演技の映像をインターネット上で配信しているように、それはどこかで社会的・物理的脈絡から切り離されている。このような変化にもっと着目し、現代の都市における音の役割を考えていくことも必要である。

こうした事情を踏まえ、助成決定後に計画を見直した。そして、IT の普及率と重層的な音環境を兼ね備え、中国系の人々がマイノリティでない都市として、調査地を香港に設定し、2008年8、9月に集中的に調査に従事した。廟の儀礼、地区の夏祭り、そして国慶節パレードと、それぞれ性質の違う夏季の行事での獅子舞と龍舞を見学した。そこでは、獅子舞の舞い手が他のチームとどのように交流しているかを観察できたほか、獅子が好きで見物に来る人から話を聞くことができた。その一方で、公園で毎週おこなわれるカンフーのパフォーマンスの観察を通して、今後の長期調

査に繋がるインフォーマントと出会った。チームの一員としてレッスンを受けながら参与観察をし、一般家庭に短期滞在することで、香港の獅子舞を取り巻く環境と、そこで形成されるコミュニケーションの様相が明らかになった。また、このようなインフォーマントや、滞在中に Visiting Student として訪問した香港中文大学の教員や学生から、香港の音環境についての話を聞くことができた。

【結論・考察】

香港の獅子舞や龍舞は、無数に存在する「武館」=カンフーの道場で、カンフーや太極拳などとともにアマチュアの若者たちによって徒弟制のような方法で担われているが、先輩・後輩の序列や部外者に対する態度はより柔軟である。若者たちは、太極拳を習う中高年の集団ともゆるやかに連携を築きつつ、イベントを通して他の武館とも積極的に交流しており、外国人の姿も珍しくない。それは地域共同体に根ざした芸能よりも、武館を離れば接点がなく、移動が激しい香港という都市に適合したコミュニケーションの形態である。そして、口唱歌によって獅子や龍の楽器を伝承しながら、西洋音楽を習い、携帯電話で日本のドラマを見て、台湾のポピュラー音楽を聴いている若者たちは、武館を情報交換の場として機能させつつ、バイミュージカリティを獲得していることが明らかになった。彼らインフォーマントとは、本研究の成果をもとに、現在も連絡を取り続けており、さらに長期的な調査に繋げていく所存である。